

5. 病畜に焦点をあてた牛と畜検査データの活用推進

大分家畜保健衛生所 1)食肉衛生検査所
○病鑑 安達恭子・(病鑑) 磯村美乃里¹⁾

【はじめに】

本県では、と畜検査データ（以下、データ）を生産者や家畜保健衛生所にフィードバックしており、疾病予防および生産性向上の指導に活用してきたが、豚と比較し牛では活用事例が少ない。そこで、病畜として搬入された黒毛和種肥育牛のデータについて搬入頭数や疾病の発生状況を集計し、データ活用方法を検討したので報告する。

【集計結果】

集計には2020年4月1日から2021年3月31日までに病畜として搬入された35ヵ月齢以下の黒毛和種肥育牛108頭のデータを用いた。①搬入頭数：肥育ステージごとの搬入頭数は、育成期7頭、肥育前期11頭、肥育中期19頭、肥育後期71頭で、肥育後期が全体の6割を占めた。②疾病の発生状況：一定の発生があり、対策を講じやすい尿路系疾病、外傷、胸腔の炎症について調査を実施。尿路系疾病（尿石等）は11頭で、肥育中期および肥育後期のみ搬入。外傷（骨折等）は21頭で、育成期と肥育後期で高率に搬入され、育成期においては病畜の6割を占めた。胸腔の炎症（胸膜炎等）は14頭で、育成期、肥育中期および肥育後期で搬入があったが、特に肥育前期においては病畜の5割を占めた。

【考察と指導のポイント】

①搬入頭数：肥育後期は体重が重いため些細な事故が重大な影響を与えやすく、異常の発生時には損失の拡大前に早期出荷したことから搬入頭数が多くなったと推察。今後は搬入時期が適切であったかの検証も必要。②疾病の発生状況：尿路系疾病は症状の進行により枝肉一部廃棄等の損失が確認されたため、早期発見が損失防止に重要であることが示された。外傷のうち骨折、脱臼は枝肉廃棄量が多く損失が大きくなる傾向があったが、データの活用により再発防止対策を実施することで損失を防止することが可能。胸腔の炎症の発生割合が肥育前期に高いのは、導入時にストレスが重複し免疫機能が低下するためと考えられ、導入直後の飼養管理を徹底することや導入前の牛舎内消毒の重要性が示された。

【データの活用】

集計結果や考察は定期刊行物への掲載や研修会等で関係機関に情報提供した。活用事例が少ない要因として、食肉衛生検査所から送付されるデータがエクセルの一覧表であり問題点の把握が困難であることが考えられたため、農家指導用として農場の問題点を分かりやすく「見える化」した帳票を作成。

【まとめ】

今後は、「見える化」した帳票により獣医師および畜産農家と問題点を共有することで3者の協力関係を強化し、農場における疾病の予防、生産性の向上および損失の軽減に取り組んでいきたい。